爪痕

●高井戸西一丁目
佐久間　愛子
（大正九年生まれ）

私は昭和一五年四月に結婚、高円寺三丁目に住み杉並区民となった。この年はもう戦争の色も濃く、贅沢品禁止令、ダンスホール閉鎖など社会に暗雲が出始めていた。

翌昭和一六年二月に長女が誕生した。世は東条内閣の時代となり、一二月八日真珠湾攻撃、太平洋戦争に突入した。翌昭和一七年はマニラ占領、シンガポール占領と戦捷（しょう）の成果が報道されたが、B29の初空襲があった。

夫は商社員であったが、企業整備令により勤める会社も他社と合併となるなど、経済界も混迷の度を増して行った模様である。昭和一八年はガダルカナル撤退、アッツ玉砕と、日に日に暗いニュースの中に暮れた。昭和一九年二月に長男の誕生を見たが、喜びも束の間、夫は病に倒れやむなく会社を辞めることになった。当時は健康保険制度も無い。食糧の不足は厳しくなる一方で、病気の夫、乳児を抱え心の痛む日々であった。長男は生後六か月で三か月の目方しかなかった。

既に各戦線とも敗退に次ぐ敗退で、この年は神風特別攻撃隊出撃など胸の痛むことばかりであった。サイパンからのB29の空襲が連日となったが、我が家には地方に知人もなく、また疎開の費用もない。焼けたらその時に考えるより仕方がないと心にきめていた。

昭和二〇年になって息子は伝い歩きを始めたが、左足が正常でないのに気付いた。慶応病院で診察を受けた結果、結核性の股関節炎と診断された。それから空襲下の病院通いとなった。治療は患部を腰から足首までギブスで固めるので、そのためにガーゼが一反分必要となる。もちろん新しいものなどはないので、古いゆかた等を持っていった。雨の日を避けてギブスを巻き、固まるのを待っておぶって帰る。満員の電車にもまれて帰るまでに腹部がグズグズになったり、また、おしっこで臀部も壊れるためにギブスを何度も巻き替えなければならなくなった。そしてその都度ガーゼの工面に苦労した。

喀血して病床にあった夫に召集令状が来た。召集日は三月一五日で、場所は横須賀海兵団である。五日前の三月一〇日夜の大空襲の時はこの令状は来ていたのであろうか。それま

で毎晩のように空襲警報がなっても夜間は通過するだけであったが、この夜は異常な警報で慌てて寝巻のまま息子を抱き防空壕に飛び込んだ。解除までずいぶん時間が長かった。あのときに焼けていたらと思うたびにぞっとした。

三月一五日の召集日には夫はもちろん帰されるのは分かっていても、動ける限りは横須賀まで行かなければならない。在郷軍人なる人の監視が厳しかったのである。そして一週間後に帰されたが、その間横須賀では身体検査の順番を待つ間、雨のなかに長時間立たされていたりしたので、帰宅後は症状は悪化、身動きも出来なくなった。後で聞いたことであるがそのときはもう軍部も大混乱で、応召しなくてもわからなかったそうである。「正直者は馬鹿を見る」というのか、行き場のない怒りを感じた。

四月以降の空襲はますます激しく、焼夷弾の落ちてくる音はザーと激しい雨のような音で、庭に落ちたのは直ぐ消したが、家にも不発弾が落ち、それは外壁を破りタンスの裏に突き刺さっていた。そのころ、蚕糸試験場より新宿まで一望千里、空襲の爪痕は凄まじかった。

八月一五日、突然終戦となったが、息子の病院通いは続いた。慶応病院も五月に本館が焼けていたが、地方からの患者も多くなり病院の廊下は人で溢れていた。

秋になって息子の患部が化膿し入院、切開したがその傷口から黴菌が入り高熱が続いて、病院でも手の施しようのない状態であったが、ある朝突然に熱が下がり、回復の兆しが見え奇跡的に助かった。そうして翌昭和二一年一月にようやく退院することが出来たが、夫は息子の入院中も家で病臥したまま、この年の七月末の暑い日に亡くなった。長女五歳、長男二歳であった。一人息子に先立たれた姑の嘆きもいかばかりか。二年後に姑も逝った。長男はその後小学四年生まで整形器具をつけ歩行していた。

また、巡って来る敗戦の日。当時、マッカーサーに一二歳といわれた日本人の年齢であったが、もう経済の成長を見なくてもよい。二度と戦争の禍だけは避けてほしい。

私は叫びたい！　戦争の蔭に何の補償もなく苦しんでいる多くの人たちが未だいることを。

敗戦日奉公袋を日に曝す

防火訓練　〈提供　佐久間愛子さん〉

一枚の新聞

●松ノ木三丁目
清水　速女
（大正七年生まれ）

昭和二〇年に入ると空襲がはげしくなった。東京は三月一〇日の大空襲の後もたびたび大空襲をうけ、五月二五日には杉並にも及んで来た。夜、空襲警報が鳴り我が家では夫が家に残り、私は三歳と一歳の幼児二人を乳母車に乗せて、現在の松ノ木中学近くの八幡通りわきの草原に待避した。当時はほとんど人家はなかった。B29の無気味な爆音とともに空襲が始まり、あちらこちらに立ちのぼる焔（ほのお）はまたたく間にもえ広がり、同時に激しい風が巻き起こり、おそって来た。種痘のため四〇度近い熱が出ていた一歳の子はおびえて泣くばかりであった。長く続いた爆音もようやく去り、少し空も白みはじめたころ不安のなか家に戻った。辺りは騒然としている。夫も我が家も無事ではあったが、焼夷弾を束ねてあった底板と思われる厚さ五センチ、直径二五センチ位の鉄の板や、弾を束ねた鋼鉄のバンドなどが庇（ひさし）を破って落下していた。附近一帯は焼け落ちたトタン、くずれ落ちた壁や瓦礫が熱気を吹き、焼けぼっくいとなった柱がくすぶりつづけ、疲れ果てた人々はなすすべもなく呆然と立ちすくみ、無残なありさまであった。堀之内小学校（当時国民学校）、立正高等女学校の焼けたのもその夜であった。後日見れば小学校の前の道路や校庭には、焼夷弾の殻が地面に無数に突きささっていた。青梅街道から高円寺の通りを少し入れば高円寺駅まで一望の焼け野原で、防火壁や焼け焦げた質屋の蔵などがところどころにその形をとどめていた。もうとても二人の幼児をつれて暮せる東京ではない。この次の空襲では必ずやられるであろう。早く疎開しなければと心は急いだ。

庭に作った青菜・はこべ・あかざ・すべりひゆなどの雑草、何が何でもかぼちゃを作ろうのかけ声で、垣根にまで這っているかぼちゃの蔓（つる）などもとり、すべて食べられるものを口に入れるよりほかなかった。米の二合三勺の配給が二合一勺となり、しかもその米も玄米になり、多くは米の代わりに満州大豆・乾麺などであった。その大豆の固かったこと、とてもとても二・三時間で煮えるものではなかった。燃料もなく、かまどに木の枝などをくべ、立ち込める煙のなか、目は痛く鍋は真黒になった。何で味付けしたであろうか、配給の僅かな塩としょうゆであったと思う。しかもその主食も遅配つづきで、外食券で雑炊食堂に並ぶ列もあった。防空壕の上の盛

り土の上にも作られたふだん草の鮮やかな緑が、道を歩きながら目についたものである。

やがて六月になり、ある日の昼間、南の空がみるみる真黒になった。どこだろうか。その日は京浜地方が空襲されたのだった。沖縄はすでに落ち、このころから昼夜の別なく地方都市へも空襲が広がっていった。焦土の中に焼けトタンを囲って焼けぼっくいで煮炊きをする家族、また、煙草（成人男性に一日七本の配給）に火をつけるのに、焼けあとに立ちどまって夏の陽をレンズにうけて、マッチ代わりにしていた人の姿も忘れられない。しかし、大本営の発表は空襲の被害は軽微でどこまでも戦いぬくという戦意を高揚することばかりで、男はよれよれのカーキ色の国民服と戦闘帽にゲートル巻、女はもんぺ姿で来る日も来る日も今日の糧を得ることに精いっぱいで、敵機の襲来におびえつつも戦争遂行を疑うことを知らなかった。

八月六日広島に新型爆弾投下（初めは原子爆弾とはいわなかった）、ソ連参戦、八月九日長崎に原子爆弾落下、しかし全く詳細は知らされなかった。

八月一五日の朝、P51戦闘機がやかましく飛ぶ中、ラジオは本日の正午に重大な放送があるから聞くようにと再三放送している。といっても我が家のラジオはとっくに故障していて、聞こえてくるのは裏隣りのラジオの大きな声である。やがて正午になると、たくさんとんでいたP51は南の海へ帰って行って静かになった。きっと、いかなる困難にも耐えて戦いぬくようにとのことと思っていた。幼児二人を連れて、暑い日盛りに隣りの境の生垣に頭をくっつけて一生懸命に聞いた。はっきりしないが、どうも今までと違うらしいということだけはわかった。何やらよくわからないままいつものように乏しき夕食をとり、幼児二人を寝かせたころにその日の新聞が届けられた。そのころは朝刊だけで、隣組の組長宅へ一括届けられ、各自でそれを取りに行っていた。どの社の新聞も一緒で、自由に選ぶ余地はなかった。ボロ蚊帳の中で黒い布をかぶせた電球の薄暗い光に新聞を開くと「四国宣言を受諾万世の大平開かんのご詔書」「聖断を拝し大東亜戦終結」の見出しであった。

戦争は終わったのだ。――何もわからないで寝ている幼児の傍らでひとり（夫は疎開準備のため留守）あまりの激変に強い衝撃を受けた。無条件降伏とはどんな世が来るのであろうか。その日のことを、戦争が終わり明るい電気がつけられてほっとしたという人もあるが、私はとてもそのような気にはなれなかった。この日はきっと私たちの生涯で忘れられない日だ。この新聞を後の世まで残さなくてはならないと深く心にきめた。たった一ページの新聞ではあるが、何度も読み返した。うす茶色にしみだらけになって行くこの新聞を今日まで大事に保存してきた。その後この日の新聞が複製されて出されたことがあったが、昭和二〇年八月一五日に手にしたこの新聞は、私に戦争の思い出を強烈に呼びおこさせる。そしてまた多くの戦死された方々、戦禍を受けた方々、深いいたみをうけ今なお苦しんでいられる多くのアジアの方々を思い、痛恨の念に耐えない。

兵士の体験

●成田東三丁目
善如寺　一男
（大正一四年生まれ）

昭和一九年一二月三日午後、「空襲警報発令」とけたたましい声を耳にしながら、壕に飛び込み空を見上げると、飛魚のようなB29が二機三機と梯段を組み飛行機雲を引いて飛んでいました。弾倉を開くのが見え「ゴーッ」「ドカン」と物凄い炸裂音、壕の中の私たち二人はとたんに身体が壕の中でたたきつけられました。恐る恐る首を伸して廻りを見ると、田無方面の空は真黒な煙が一面にただよっております。私の壕の近くの大根畠に落ちたので、地中深く潜ぐった私たちは助かりました。

一二月三日の被害　投下爆弾　四〇一、死傷者　四二九名、被害家屋　二〇六戸、罹災者　六八七名

勤務終了後、西武線、中央線不通のため花小金井駅より田無へ出て、真暗な青梅街道を、非常食の煎大豆を二、三粒出来るだけ長持ちするように、なめるようにして食べながら歩きました。途中雑炊食堂でもあればと、キョロキョロと探しながらの道筋でしたが、とうとう帰宅するまでなにも飲食する事が出来ず、花小金井より杉並まで、三時間以上灯火管制で暗い道路を歩きました。雑炊食堂又は国民食堂といったか名はちょっと忘れましたが、どんぶりに大根葉と飯粒が大きくふくらんだのが、大さじに一杯位醤油汁に浮んでるような汁です。この食堂が阿佐ヶ谷駅南通りのミヤタ家具とミカミ薬局の中間にあり、何回か幸運に恵まれすすった想い出があります。

「欲しがりません勝つまでは」

昭和二〇年二月八日徴兵年齢一年引下げ。「一言御あいさつ致します。この度善如寺一男は命により本日東部第七二部隊に入隊致す事になりました。入隊の暁には一意専心軍務に精励し、米英撃滅のため奮戦する覚悟でございます。ではいって参ります」肩に日の丸をたすき掛け、腹に千人針を巻いて「天に代わりて」東洋平和のためならばと入隊、二月一一日、B29空襲の中、肩に竹筒製の水筒飯盒を持って満州へ。二月一九日、中国東北部国境見える第二六三九部隊へ。まゆ毛鼻毛が凍る冷下三〇度。

八月九日未明、ソ連侵攻。我が部隊は牡丹江畔に出動。部

隊長は、「薪を持ってでも戦車に体当たり攻撃せよ。神州は不滅なり」武器は手榴弾二個小銃弾薬は六〇ヶ。八月一二日夜半いよいよ私たちの兵舎も爆破。ドラム缶を銃で打ち布きれに火をつけると、轟音と共に真赤になって空に飛びます。私たちは見習士官に引率され、掖河方面に夜行軍。朝隊列が判かるようになると、四十数名の隊員が一〇名足りず「おい兵長陛下の軍人を掌握できないでどうする、お前から斬ってやる」と叫び軍刀を抜き、自分の手を傷つけるような錯乱状態。古年兵の私語「弾は前から来るばかりじゃネえよ」一四日未明、上等兵他二名で斬込隊編成、「背中に黄色火薬（ダイナマイト）を、そして蛸壷に入りマッチで火をつけ戦車に体当たりせよ」。しかし一回の演習もなく突然の事、俺もこれで駄目だ。しかしなんとか俺の死様を、故国（くに）の父母に伝える事が出来ないか、只々胸中はそればかり、橋の対岸約三〇〇～五〇〇メートルの前方に、敵戦車数十台。廻りはソ連兵が自動小銃を持っております。

時に小隊長が本部へ伝令を出し、攻撃時刻の打合せを出したが本部はなく、小隊長の判断で一応の撤退。それを聞いた時の恐ろしさ、うまくやったら生きられるのじゃないか、などその時の気持ちは言葉に言いあらわせません。八月一四日現中国残留孤児と思われる方々と一緒の敗戦の道、「兵隊さん助けて」と泣きながら幼子を背負っている姿、道端には機銃掃射に逢った死体に、蝿がたかり大仏のように真黒死臭がプンプン、この方々の最後は永遠に誰にも判からないでしょう。

被服は誰かにはぎ取られ、身体の一部は犬か烏につつかれ、喰い荒されての野ざらし状態。しかしその死に対して祈る事も弔う事も手を合わせる事もなく、ただ無言で頭上の敵機の機銃掃射に身を隠し、戦車の追撃を避けながらの逃避行。夜は夏衣なのでもう寒く、側溝で横になっていると、雨が降り体にじわじわと滲みて来るが、身体は敵襲があるので動かせない。夜が明るくなり敵戦車、飛行機の出動の前に道筋にそっての行軍。八月一九日、横道河子に到着。敗戦をきく。むなしい。何のために戦かったのか、辛抱したのか、死んだのか。あの友にもこの人にも、それぞれの輝やかしい未来があったのに、何のために狂気になり殺し合ったのか。

九月一〇日、ソ連入国抑留。昭和二三年復員。戦争は前線も後方もなく、野戦では正確な命令も通じない場合が多々あり、また味方を誤って殺す場合、手当てが遅れて亡くなった時、ただ一枚の戦死公報。

最後に、体制もイデオロギーもお互に理解し、信頼して協調協力して、武器を使わない平和な世界の建設に私は生きたいと思います。

我が町　松山通り

●阿佐谷北三丁目
曽根　藤子
（大正三年生まれ）

私が嫁いで新居を構えたのが阿佐ケ谷三丁目の奥まった所でした。当時の阿佐ケ谷町の全区分図は、国鉄「あさがや駅」南口から青梅街道に接する広範囲と北口の一区画を［阿佐ケ谷一丁目］とし、それから以北へ蛇行のように連なる［第九小学校］口までの道路・通称［松山通り］の右側商店街を［阿佐ケ谷二丁目］、左側が［阿佐ケ谷三丁目］で、道の両側には木造の電信柱や街灯が突出て二間半余（四五〇センチ）の道幅もより狭さを感じました。三丁目側には「松山郵便局」「松山交番」「松山公園」と「松山」を名付けた公共施設がありました。

新婚夫婦がこの町に腰を据えてから未だ十か月も経たないのに［日中戦争］から米英大国を相手の［太平洋戦争］へと戦火は拡大され、私たち三丁目町会十班（七三世帯）の隣組家族は元より全国民の不安と緊張の度を募らせました。緒戦の新聞やラジオの戦況報道は勝ち軍の様相で祝捷気分に酔いしれていましたが、昭和一七年四月一八日、米爆撃機による初の帝都空襲（早稲田方面の焼夷弾投下）以来決意を更に新たにしました。各町内会で防空頭巾を被り、モンペ姿にズック靴を履いた主婦や娘さんたちが、警防団員の指導でバケツリレーやバケツの消火訓練などを熱心に受けました。

照り返しの強い夏日には、近くにある［玉野の森］の根株に腰を下ろし在郷の将校さんたちから［三角布］を用いた各種の看護法を教わったりもしました。国の御召しを受け、長髪の頭から丸坊主になった会社員や商店主の出征も日ごとに目立ち、町会旗を先頭に白い割烹着姿に［大日本国防婦人会］や［日本愛国婦人会］と大書した肩襷の女性たちが日の丸の小旗を振りふり軍歌を合唱しながら駅まで行進し「〇〇くんバンザ～イ」武運長久を祈って電車を見送るのです。ラジオから軍艦マーチが流れ、『西太平洋上・日米英艦隊は熾烈な攻防戦を展開、敵〇〇艦二隻を撃沈せり・我が方の損傷軽微なり』の海軍報道を、どこまで信じていいのか？

（なのに）ああ遂に来ました……兵役免除（丙種）で三三歳の主人にも［赤紙］が？　しかも［横須賀第一海兵団］入団の通知でした。出征の朝、門前で隣組、知人、婦人会員に

型通り壮行のお礼を述べ、駅まで一二分の松山通りを行進、北口の駅前は幾組もの応召者の見送人でゴッタ返していました……夫がこの松山通りに帰ってくるのはいつの日？……無事を心に念じて別れ別れに、そして私の独りぼっち生活の始まりです。南北駅前の［強制疎開］の跡片付けなどの勤労奉仕にも駆り出されました。『敵B29数機は銚子沖〇〇海里より東都に侵入せる模様なり』東部軍管区情報がラジオから流れる、寸時にしてサイレンがけたたましく鳴るプォ～ゥプォ～ゥ、〝空襲警報発令！〟メガホンを口に警防団員が灯火管制下の路地裏へ伝達して回る声を耳に、自宅の二階物干し台から闇夜の上空は何も見えず轟音が不気味に響くだけでした。「姉ちゃん寂しかろ」と母や幼い妹や弟が交代に泊まり込みに来ます……が空襲で都心の夜空を染める火焔やお腹に響く爆音や砲音を間近に感じ「阿佐ケ谷は恐いよ～ぅ」と、広い農地の練馬の実家へ帰ってしまいます。

二本の探照灯がくっきり敵機を捕らえ高射砲弾が炸裂する様に、思わずヤッタァと叫んでしまいました。参謀附特殊班として内地勤務の主人との面会もできました。ですが横須賀集会所への電車はいつも満員で身動きがとれず、警報が出れば途中でストップまたは下車して退避させられ、片道二・五時間の道程も一日がかりで苦労しました。面会で行き来する度毎に東京、横浜も焦土と化す様が車窓から展望されました。昭和二〇年八月、米爆撃機は強烈な［原子爆弾］を広島市に次いで長崎市にも投下、一瞬にして何万人の非戦闘員まで殺傷され遂に同一五日、天皇陛下のお言葉で戦争は終結しました。この終戦が一か月遅かったら［阿佐ケ谷］も丸焼けだったかも？ネ～、良かったわ……階級章（兵長）を外した主人が軍服、肌着、手回り品や白米を詰めた衣嚢に毛布を上乗せしエッチラ、オッチラ、喘ぎながら、虱をお供に松山通りに帰って来たのが十日後の事でした。

長い一年八か月の兵隊で元の会社も解雇になり……夫婦共稼ぎの決意で杉並警察署へ［露店営業許可願］を提出し、地回りの元締めから［露店鑑札］を受け初体験・俄露店商の幕開けは、強制疎開で広くなった阿佐ケ谷駅前南北口の道筋に定められた位置で素人商売するのです。ガタゴトガラゴロ、柄にもなく大きな音を出す小型の荷車を引いて松山通りを往復して一年余りも二人で頑張り、その後、主人は良き伝あって元の社会人に戻りました。